
闇夜を奔るふた筋の煌光

暁月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜を奔るふた筋の煌光

【Nコード】

N1182D

【作者名】

暁月

【あらすじ】

原作完全無視。作者の趣味100%です。私設HPにて連載中の作品を推敲し若干展開を変える可能性あり。原作しか認めない方はご遠慮ください。読んでからの苦情は一切受け付けません。タイトルは『やみよをはしるふたすじのひかり』

序章 輪郭の朧な幻影（まぼろし）（前書き）

登場人物は、蘭・赤井・ジンの三人が中心で、他数名です。中には名前しか出ない人物もいます。

あらすじにも書いたように原作完全無視、設定一切不合致。つまりパラレル……というより、コナンキャラを使用した自己創作と考えた方が正解です。

純粋な『名探偵コナン』じゃないとダメ、という方はこのままお戻りください。

序章 輪郭の朧な幻影（まぼろし）

それは突然といえば突然、必然といえば必然だった。『日本警察の救世主』を襲った、そして一人の少女、いや、少女の周りをも否応なく巻き込んだ悲劇。

哀しみに暮れる間もなく植え付けられた偽りの記憶に誤魔化され、いつしかそれを真実だと鵜呑みにしていた少女。しかしながらそんな虚構で飾り尽くすには限りがあった。

「 どうして？ どうしてなの？」

大切な者を失った理由 真実を欲する想いは止まる事を拒んだ。
次第に見えてくる裏工作。全てが明るみになったその時、少女が自らに下した結論。

「 ……死にたい。死んで、わたしもそばに 」

けれど少女の望みは周囲に阻害されてしまった。そして 。

『主文。被告人を懲役一年六ヶ月に処する。この裁判が決まった日から二年、刑の執行を猶予する』

少女が贖罪を体言する中、終わりと始まりを告げる審判が幕を下ろした。

第一章：それはすでに偽りの間中　〜一幕〜

「あの……元気でやってますか？　淋しかったり、辛かったりしませんか？」

問い掛けて自分に向けて失笑を放った。その言葉に込められた白々さが滑稽だったからだ。第一、よそよそしさを払拭するには、これまでの時間が全くと言って少な過ぎた。出逢った日がそのまま二人を別つ日になってしまったのだから仕方は無いのだが。

そもそも、本当なら一生出会わない確率の方が高かった筈で、こうして二人が対面している事自体がまさに奇跡と言えた。

「俺の事は気にするな。それだけの事をしてきた報いなんだからな。そんな事より、此処はお前が来るような場所じゃねーだろう」

「でも」

「もう来ない方が良いんじゃないのか？　そもそも俺は、お前に会わず顔が無い。それはお前にも痛いぐらいに判っている筈だが」

「……でも」

一旦会話が途切れると、もう後に続く話題は無い。

男が言うように、少女には男に会いに来た理由が自分でも良く解らなかつた。何故なら男は、少女にとっては怨むべき相手であって、

決して自分から近付いてはならない相手だからだ。

今朝方も、出先を告げる少女に対して、元警視庁捜査第一課の刑事で、現在は探偵業を営む父親と、弁護士事務所を構える母親に外出を咎められたのだ。

『あんなヤツにお前が面会に行つてやる必要は無え！』

『そうよ？ 大体……会つてどうするつもりなの？ 例え恨み言を言つた処で、彼が生きて帰つて来る訳では無いのよ？』

両親の止めるのも聞かずに男の元を訪れてはみたものの、結局は何を話したら良いのかまるで考えが纏まらない。結果、こうして案の定沈黙を持って余す事しか出来ない。

自分が厭に滑稽に感じてしまい、訳も解らず気持ちだけが焦ってくる。

何でも良いから話題を、と思うと余計に言葉も浮かんで来ない。そうこうしているうちに、刑務官が面会の終了を急かし始めてくる。

一日の面会者の多さに怠慢している彼等は、会話が途切れた時点で無理矢理面会を終了させてしまうのだ。例え開始後10分に満たない状態であっても、容赦なく時間は返上させられてしまう。それは今、この二人に対しても例外無く振る舞われようとしている。

少女は少しでも抵抗を試みるも、諦めたように肩で小さく嘆息を漏らし、ゆらりと腰を上げた。

「また来ますね、ジンさん」

少女はそう言うと面会室を後にした。

長々と続く廊下を歩く爪先に力が入る。そのまま帰ってしまう事が自分自身、何故だか納得出来ないのだ。面頭向かつては何も話せないくせに、いざ一人になった途端、様々な感情が沸き上がってきてしまう。勿論、その中では怒りの感情が最も大きいのは確かだ。

しかしその反面、同じぐらい“熱い想い”も抱いているような気がするのはどうしてだろう。少女にはそれが理解出来ずにいた。

普通に考えれば有り得ない話だ。ジンは少女の大切な存在を、彼女から永遠に奪ってしまうという大罪を犯したのだ。大切な者を目の前で失った苦痛は、未だ癒える筈は無い。決して忘れる事の出来ない悪夢だったのだから。

「……新一、私はどうしたら良いのかなあ？ 自分じゃ判らないよ」

そう呟いてはみても、返事など返ってくる訳では無い。それどころか、余計に哀しみが自分を深い漆黒の闇へ掠う為に、手招きをしているのだと錯覚してしまうだけだ。少女は今来た廊下を振り返り、見つける宛の無い答えを、潤んだ瞳で探ってみた。

だが、当然そんなモノが簡単に得られる筈も無く、失意と共に俯いて残りの廊下を面会者用の玄関まで歩いた。

「！ つ！」

施設の玄関から外に出た少女は、異常に高い気温に一瞬眩暈を覚えた。身体から血の気が引く程に平衡感覚が定まらない。軽い貧血も伴って、少女の重心は大きく前方に傾いた。

「 蘭っ！」

倒れ込む蘭を支える様に抱き留めたのは、蘭を“永遠の親友”と言って憚らない財閥令嬢だった。蘭の母親である英理から連絡を受け、心配して様子を見にやって来た。しかし、来たは良いのだが、蘭が既に面会に当たっていた為に、玄関で待機していた処だ。

そして、出てきた蘭に声を掛けるタイミングを失って、見送ろうとした途端この状況に至ったという訳なのだが。

「大丈夫、蘭！？」

「その……っ？ ど……っっ」

親友の呼び掛けに辛うじて相手を認識した蘭。それも次の瞬間には全体重を預けて意識を失ってしまった。そんな蘭の憔悴しきった蒼い顔を見つめると、園子は急に哀しくなり、気付いた時には頬を涙が伝っていた。

無論、何故蘭がこうなったか知っているからだ。自らの脳裏に降りてきた複雑な思いを押し退けるように、園子は囁いた。

「ごめんね、蘭」

そしてその声は涙に飲み込まれその場に影も残さなかった。

第一章：それはすでに偽りの間中（二幕）

園子についてもっと正確に言うなら、直接的にはないものの加害者側に立つ身だ。だから、こうして蘭の前に現れたり出来る立場でない事は承知していた。

そしてそれは蘭ばかりでなく、英理や小五郎に対しても言うまでも無い。事実、蘭が意識を失う前に洩らした一言が悠に語っている。それでも園子が蘭の前に姿を見せたのは、その事に敢えて触れずに連絡をくれた英理の心遣いが嬉しかった事と　そして何よりも、園子自身が蘭を大切に思っていたからだ。

「ごめん、蘭。本当なら……あたしなんか来れた義理じゃないって判ってるのよ。でもね蘭、やっぱりあんたはあたしにとって大事な友達なの」

流れる涙を拭うでもなく、ひたすら贖罪に耽る園子を何人も通行者が掠めて行く。場所柄、鬱な表情を隠そうともせず、それでも全くの他人事でもないと言つかのように。

東京都葛飾区小菅1 - 35 - 1

此処は日本最大の未決犯罪者収容施設である『東京拘置所』だ。刑事事件で起訴された所謂“被告人”が裁判を経て刑に服するまでの勾留、及び、死刑確定者がその執行を待ち合わせる場所でもある。

この施設には、蘭が面会に来たジンを初めとして、実は園子の父親 鈴木財閥会長・鈴木史郎氏も収容されているのだ。

ただ今日は、予め本人からの連絡で検察庁特捜部の取調べが行われる事が判っていた為、園子自身は面会の予定は無かった。そこへ英理からの電話が入ったという事だ。

因みに、何故鈴木会長が身柄を勾留されているのか。それは園子の蘭に会える立場でないとの点から推して諮^{はか}るべしだ。

「……………ん」

「ら、蘭？」

「その……………」

意識を取り戻した蘭は、自分を支える親友の腕の中で奇妙な安らぎを感じた。それから見上げる様に相手の顔を覗き込むと、困り顔でか細く声を洩らした。

「？ 何？ 泣いてるの？ もしかして、まだ責任感じてるんじゃないでしょうね」

「当たり前じゃない。パパのせいで新一君は……………！」

止まりかけていた園子の涙が再び流れを速めた。歯を必死に食いしめる姿が本当に痛々しい。園子はまともにも蘭の顔を見れずに、出来るなら今にも蘭の目の前から消え去りたいとでも言いたげだ。

そればかりか、仮にここで蘭が“死ぬ”とでも命令すれば、躊躇う事なくその命を差し出すだろう。それぐらい自分を責めてきたに違いない。親友だからこそ解る。そして、解るからこそ蘭自身辛かった。

「バカね。園子が悪いんじゃないって知ってるよ？ だから、園子に泣かれる理由が解らないよ」

蘭がこんな事を言うのは、園子に対する慰めや憐れみではない。本心から園子の事を思っただけの事だ。彼女自身充分に苦しんだ筈。自分を責めるあまり、ろくに食事も摂らない日々が続いたのだろう。顔を合わせなくなって数ヶ月も経っていないのに、蘭同様痩せ細った身体や、糞^{やっ}れ果てた頬が雄弁にそれを語っている。

園子だって、蘭から見れば『組織』^{おとこな}の被害者なのだ。ただ運悪く創設者の娘に生れついてしまっただけの話。それ以外は突っ込み処などありはしない。蘭にとって掛け替えのない存在のままだ。

「蘭？ 無理しなくても良いから。あたしには蘭にそんな風にも言ってもらって資格無いよ」

「ダメだよ園子。私の前からいなくならないで。もうそんな事言わないって約束して？」

「……らあん」

それ以上返す言葉も無く、蘭に見つめられるがままの園子。その瞳に映るのは、潤みを帯びた蘭の熱い眼差しと、その奥から伝わる強い友情の輝き。

そんなモノを見せ付けられてしまえば、逃げ出す事など出来ようも無い。

「…………あたし。虫が良いかも知れないけど、蘭…………あんたが悪いんだからね？」

「判ってるよ、園子。だから…………ね？」

蘭はそう言って園子に微笑みを贈ると、立ち上がろうとして身体に力を入れた。だが、未だ少しだけぼんやりした意識に、再度目の前が暗転しそうになる。

「大丈夫、蘭!？」

「ん、何とかね」

「急に立とうとするから ……」

「大丈夫だよ。園子が支えてくれるって解ってたから」

「…………バカ!」

蘭の作った脳天気さに漸く園子も口許を綻ばせた。相変わらず瞳は潤んではいたが、久方振りに見た親友の笑顔に、蘭は少しだけ癒された気がした。

ただ、それでも自らが背に抱く高いコンクリート塀 世間と一線を画す無常な空気から逃げおおす事は出来なかった。

第一章：それはすでに偽りの間中　〜三幕〜

放射状にそびえ立つ近代建築を背中に過ぎ、蘭と園子は、最寄りの『小菅駅』に向かい歩く。そんな折、二人は春先に起こった事件について話を始めた。

何故件の『組織』が摘発されるに至ったのか。そもそも『組織』とは何なのか。そして。

その件と『鈴木財閥』にどんな関係があるのかを。

とにかく当時は、連日その関係の報道が世間を騒がせた。世界を股に架けた“インサイダー取引”が摘発され、日本屈指の財閥までが捜査線上に上がった。

当然の事ながら両者について様々な憶測が飛び交ったものだ。敢えてそこまで二人は掘り下げなかったが、それほど世間の関心を掠ったのは確かだった。

「ねえ園子、結局あの『組織』って一体……何だったの？」

「……うん、パパに聞いた処に依ると、鈴木財閥の株価操作をする為に作られたペーパー会社らしいよ。元々は株主総会を円滑に取り仕切る為の費用を捻出する為だったみたいだけど、ね」

園子曰く、父親の史郎も初めのうちは、そのペーパー会社に目を光らせてはいたらしい。それが事業拡大に忙殺されるあまり、野放しにしていた時期があるのだとか。

それが一段落して監査を入れた時には、既に史郎の手に負えないほどの組織に成長していたという。最早、大株主の方が裏取引に味を染め、解散による暴動を回避するには組織を維持するしかない状態にまで発展していたらしい。

今回の件は、それを善しとしない少数一派の内部告発を抑えようと働いた事が発端となつて起こつた。恥を承知で、探偵である新一に調査を依頼し、内部調査を進める中で新一が凶弾に倒れた。

その事が原因で摘発に至つたという訳だ。

「パパがちゃんとしていれば新一君は死ななくて済んだのに……！」

「もうっ！　またそんな顔する！　確かにそうかも知れないけど、園子のお父さんだつて辛かつた筈よ？　……多分、どうしようもなかつたんだよ」

「……蘭」

園子の苦悩に歪んだ顔が蘭の胸をえぐつた。自分が何を言つても一切の罪が消える訳ではないと知っているからだ。それでも、少しでも親友の心の負担を軽くしてあげたい。そうじゃないと自分が自身が押し潰されそうな気がする。

だから蘭は、瞼を閉じて気を落ち着かせると、園子の手を取つて駅への道を急いだ。

蘭と園子はその後、池袋まで足を延ばしてサンシャイン内のレス
トランで食事を摂った。久し振りの再会が2人の食欲を増進させた。
ただ、蘭達の本当の目的は食事などではない。何となくだが水族館
に来たかったのだ。

食事を終えた二人は足速に階下へ下り、童心に還って幻想的な世
界に浸った。巨大な水槽を勇壮に泳ぐ幾多の魚を眺めていると、嫌
な事を忘れる事が出来る。あれほど落ち込んでいたのが嘘のように、
二人は屈託無く微笑わらい合った。

「次はいつ会おつか？ 私は日曜日なら毎週空いてるよ？」

「あたしも日曜日なら、ね。お互い、仕事しているとそれぐらいしか
時間が合わないね。学生だった頃が懐かしいよ……」

別れ際にそんな事を話していると、昔の想い出が頭を過ぎる。ま
だ高校生だった頃が懐かしい。それまで、趣味の一環で色々な事件
に対して推理を講じていた新一が、本格的に警察の捜査に首を突っ
込む様になったのもその頃だ。

“東の高校生探偵”だとか“日本警察の救世主”だとか囃し立て
られて、本人も有頂天になっていたものだ。

それが、大学在学中に事務所を立ち上げてからは、学業そっちの
けで日本中を駆け回る様になり、まともにデートも出来なかった。
半ば諦めてはいたが、蘭自身随分淋しい思いをした事を今でも覚え
ている。

何度も喧嘩した。実際に別れ話も浮上した。それでも2人が別れ

なかったのは、ある意味意地だったのかも知れない。好きなのは一緒にはいられない。でも間違はなく好きではあった。

改めてその想いに辿り着いた蘭の頬を、無意識のうちに涙が伝っていた。

「蘭！？ どうしたの？ あたし……何か気に障る事言ったかなあ？」

園子が心配そうな顔で蘭を見据える。親友の存在を忘れて感慨に耽っていた蘭は、そう問われて自分の涙に気付いた。

「ううん？ なんでもない。ちょっと思い出したただだよ。ホントに懐かしい思い出がたくさんあるな……って」

「新一君の事、だよな？ ごめんね、蘭」

園子の曇った顔を見て、蘭は内心“しまった”と思った。自分の感傷が再度彼女を傷付けてしまった事に申し訳なくて情けなくて仕方がない。

けれど、下手な弁解をしても更に傷を深くするだけだ。蘭は一つずつ選んで、綻びかけた友情を繕う言葉を紡いだ。が、その言葉は蘭の首を絞める麻縄に姿を変えた。

第一章：それはすでに偽りの間中（四幕）

「うづん……謝らなきゃならないのは私の方だよ。新一が手を出さなきゃ、園子のお父さんが捕まる事だって、無かつたんだし」

「ちょっと蘭、それフォローになってないって。……でも、言いたい事は伝わってるから」

努めて明るく振る舞おうとする園子に、蘭はまた瞳を潤ませる。園子だって泣きたい筈なのに、必死で堪えているに違いない、と。だが、そう思う事で余計に涙は溢れてくる。蘭はいたたまれなくなって、逃げるように駆け出してしまった。

「蘭!？」

そう叫ぶ園子に振り返る事もせず、ただ流れる涙を何度も手の甲で拭いながらの疾走。そんな事しか出来ない自分に、蘭はこのまま消えてしまいたいとさえ思った。

自分は園子を奈落の底に落としてしまったのではないか？ 結局は彼女を心の底で憎んでいるのではないか……。

負の感情ばかりが後から後から溢れてくる苦しみが蘭を押し潰しにかかる。堪えきれずに力いっぱい目を瞑った蘭は、走っていた歩道の些細なギャップに爪先を捕られて転んでしまった。

「　っ！」

暮れかけた陽射しが蘭を見つめる。通行人は無関心を装い、無表情で彼女の傍らを過ぎて行った。立ち上がる気力も無い蘭は、歩道に突っ伏したまま声にならない嗚咽を洩らした。

　転んだ拍子にバッグから飛び出した蘭の携帯が、数メートル先の地面で着信を告げている。それでも蘭には、それを取りに行く勇気が無かった。発信相手には思い当たっていたからだ。多分園子に違いないだろう、と。

　恐くて拾い上げる事さえ躊躇われる。だが携帯は止む事なく震え続けた。切れては震え、震えては切れる。そして、それを数回繰り返し返すと諦めたらしく、うんともすんとも言わなくなった。

　蘭は漸く立ち上がって携帯を手にとってディスプレイを確認した。案の定、着信は全て園子からだった。

「……園子、ごめん」

　一言だけ呟くと、周りを気にするでもなく歩き出す。一部、遠巻きに蘭を囲んでいた数名の通行人も輪を崩して散っていく。その様子を離れて見ていた園子の頬にも、拭われる事なく涙が伝っていた。

一週間後、再度ジンの許を訪れた蘭。相変わらず、何の為に彼を訪問しているのか彼女自身判断出来ずにいた。豊富な話題がある訳でも無く、ましてや話に花が咲くでも無い。

先週同様、時間だけが無情に二人の間を摺り抜けていくばかりだ。そして少しでも会話が途切れようものなら、容赦無く刑務官の睨みが二人を射抜いた。

「まあ、拒否も出来るんだがな。しかし、せっかくこんな辺鄙へんびな所に来てくれてるんだ。会わない訳にはいかねーだろう」

やや面倒臭そうに涼やかな視線を蘭に贈るジン。それを受けて蘭の睨みがピクリと動いた。彼の口から零れた言葉に秘められた念いを汲み取つての事だ。

朴訥で無関心を装ってはいるが、実は彼なりの蘭に対する優しさは伝わってくる。逆に、これだけ優しいジンが、どうして件の悪事くだんに身を染めるに至ったのかと不思議でならない。

「私が知りたいのは、新一がジンさん……貴方を庇つた理由です。例え新一が探偵だったからとしても、何の理由も無しに、あんな顔して死んでいける筈が無いもの」

実際、蘭がここまで言うのも無理からない事だ。幼馴染みの性格や行動心理を熟知しているからだけではない。例の哀しい出来事が発生してしまうより以前、蘭は新一からジンの事を聞いた事があったのだ。

勿論、それは日本屈指の財閥の当主からの依頼に関して、新一が事の重大さを零した事に歎^{たん}を発していた。

職業柄、依頼人に対しての守秘義務がある事は、蘭も父親という同業者が身近にいる事で知っていた。しかし、丁度その時期に新一の一番大切な女性は研究留学の為に日本を離れていた。

本来なら唯一相談出来る筈のその相手が間近にいなかったのが原因だろう。

新一はあまりの重責に耐え兼ねて、蘭の許を訪れたという訳だ。

「そんな事……私なんかに話して良いの？ それに、正直言っただけきたくなかった。鈴木会長がそんな大変な状態だなんて……。園子にどんな顔して会えば良いのよ……!？」

蘭の落胆振りに、新一は申し訳無さそうに苦悩の表情で応えたものだった。そして、そんな新一を見たら蘭だっただけそれ以上何も言える筈が無い。新一がどんな思いで自分に話したかを考えたら、とても言葉が浮かんできやしなかった。

第二章：見え隠れする幾多の想い（一幕）

「悪い、蘭。正直迷ったんだぜ？ オメーに話して良いのかわかる。でもオレが話さなくてもいずれ世間に知られる事になるかも知れないんだ。それまでにオメーの中で気持ちを固めて、園子の支えになってやって欲しいんだ」

一気に言葉を通した新一は、相変わらず苦渋の色をその顔に刻んでいる。だからと言って、新一の言い分に耳を傾け、更に実践するのは容易な事でないのは明白な現実。

下手をしたら園子との間に友情は失ってしまうかも知れないのだ。自分より前に事の真相に近付いていた蘭に対して、園子が憐れみを感じてしまう事が無いとは言えない。

「そんな事？ 親の不始末で“一生の友達”を失う訳にはいかないわ！ 私……そんなに強^{したた}かに振る舞うなんて出来ないよ。なんで今そんな話を私にするのよ？」

蘭が新一に抗議したのも仕方がない。大体が“寝耳に水”で、自分の周りにそんな大事が降り懸かってくるとは予想だにできなかったからだ。

「そつだよな。オメーの気持ち、考えてなかったのかも知れねーな。ごめん。自分が辛いからって、安易にオメーを頼っちゃまって」

淋しげに微笑んだ新一は、蘭にもう一度謝ると帰る準備を整え始めた。その時、頭を垂れてその様子を眺めていた蘭の瞳に映ったのは、新一の自信喪失した顔だった。

純粹に“推理”を展開している時をはじめとして、過去にこんなにも頼りなげで淋しそうな顔など見た事が無かったというのに。蘭は、漸く新一の気持ちに気付き、立ち上がった新一にか細い声で呟いた。

「 待つて、新一。お願い……待つて? 」

「ら……ん? 」

「 やつぱり逃げたくないから。園子を失いたくなんかないから。全てを話す事は出来ないかも知れないけど、話せる範囲で話して 」

一変して、蘭は懇願するように小さな声を振り絞った。新一の動きが止まる。蘭の言葉の奥にある、自分に対しての“祈り”にも似た想いに胸を撃たれたからだ。

だからではない。けれど一瞬だけ迷って、新一は蘭を振り返った。

「 全部を聞いたなら、幾らオメーでも潰れちまうかも知れねー。それでも良いか? 」

新一の重い一言が蘭の身体を緊張させた。

「 どうした。まくし立てたと思ったら、今度は塞ぎ込んだりして」

その言葉に蘭が我に返ると、ジンの穏やかな眼差しが蘭を見つめていた。その瞳には少なからず蘭を心配する気配が見て取れる。

決して表に出す事をしないが、本当は蘭を精一杯気遣う優しさ。その事に気付いた蘭は、強過ぎてまともに目を合わせる事が出来な
いでいた。

「 すいません。ちょっと……新一が言った事を思いだしてしまって」

「 ほう。 “ あいつは極悪人だ ” とでも言っていたのか？ 」

「 いえ、違います。 “ 哀しい男とひだ ” そう言って淋しそうな顔をし
ていました」

それを聞いて、ジンは思わず息を呑んでしまった。大きく見開か
れた眼まなこは、信じられない言葉を聞いたと言いたげだ。そんなジンを、
蘭は啞然と見返す事しか適わない。

そして蘭の視線に気を取り戻したジンは、今しがたの思いを打ち
消すように、首を振って苦笑した。

「そりゃ買い被り過ぎだ。俺みたいな悪人に“哀しい”なんて無縁だ。優秀な探偵だとは聞いていたが、案外他人を見る目は無かったんだな」

そう言った後、ジンの苦笑は失笑に変わった。次第にその表情は曇り始め、遂には憂いを感じさせるに至った。

「あの……ジンさん？」

「帰れ」

「……え？」

「今日は帰れ。急に一人になりたくなった」

呆気にとられる蘭を他所に、ジンは刑務官に面会の終了を告げた。刑務官は初め怪訝そうにジンと蘭を交互に見遣ったが、その考えも直ぐに自己完結したらしい。

面倒臭そうに一言二言蘭に言葉を掛けると、ジンを促し面会室のドアを開けた。

「また来ますから。私がちゃんとジンさんを理解出来るようになるまで何度でも来ますから……！」

刑務官に連れられて部屋を出ていくジンに、蘭は思い切り声をあ

げて叫んだ。その声は2人を隔てる極厚の亚克力板を突き抜け、ジンの耳に　　というより心に届いた。

一瞬歩みを止め、その肩が震えたかに見える。しかし直ぐにジンは歩きだし、無情にドアが軋みを帯びて閉じられた。

「……………新一が言った通りだね」

遠くなるジンの気配を感じながらそう呟くと、蘭はやはり淋しげに視線を落とした。

第二章：見え隠れする幾多の想い（二幕）

家に帰る電車の中、蘭は色々な事を回想した。ジンに新一の言葉を告げた時に見せた憂いを帯びた表情の事。ジンとの面会中なのに新一を思い出した事。

それから、自らジンに叫んだ言葉の真意について。

どうして自分は、ジンに対してあんな事を言ったのだろう。彼が原因で新一が死んだのは確かだ。

何故なら新一はジンを庇って凶弾に倒れたのだから。それは紛れも無い事実。そう考えれば本当に恨めしい存在であるはずなのに。

だのに何故……。

どうして自分はジンの、あの淋しげな顔に打たれてしまったのだろう。そしてジン自身は自分　つまり蘭が紡いだ言の葉に何を感じたのだろうか。

去り際に見た肩の震えは、彼のどんな思いを表していたのだろう。考えれば考えるほど、答えは遠退いていくような気がした。

『全てを話せば、いくらオメーでも押し潰されちまうかも知れない』

新一に忠告されても“自分は大丈夫だ”と、そう自分自身に言い聞かせた。

その思い通り、努めて平静を装う事も辛うじて出来ていた。新一があんな事になってしまう前までは、だが。

あの事件を振り返れば、ジンの事を理解しようなどとは普通考え

られない。少なくとも自分の両親　小五郎と英理はそう言っている。

自分の胸の中で冷たくなっていく想い人の、何故だか穏やかな死に顔を見続けなければならなかった悔しさは筆舌に尽くせない。

それ以上に、何故あんなに穏やかな死に顔が出来たのかが解らない。

「……苦しかったはずなのにな」

これは、一旦警察病院の霊安室に安置された新一の顔を拝んだ小五郎が、堪らず洩らした悲痛な声だ。

元警視庁、それも捜査一課の刑事だっただけに言える一言だったろう。

頭部や心臓といった、いわゆる“即死急所”さえやらなければ、人間は暫くは存命する。

ただ、意識があるうちの大半は尋常でない痛みに半狂乱になるのだそうだ。

苦しみに悶え、その死相は見るに堪えないとまで言われるほど歪んでしまうのだと。

やり切れない表情で蘭に説明すると、小五郎はそのまま蘭に背中を向けて小刻みに肩を震わせていた。霊安室から帰る小五郎を見送る際、彼の目は真っ赤に充血していた。

蘭は今でも鮮明に思い出す事が出来る。と同時に、その時の新一の顔を忘れる事が出来ないでいた

・
・
・
・

その日、蘭は園子の家を訪れる約束があつた。月に一度、園子と食事に出掛ける事になっていて、

「その前に軽くお茶でも」と、数日前にそんな話が出ていたからだ。約束の時間に僅かに蘭が遅れると、何故だか新一が鈴木邸を……というより当主の史郎を訪ねていた。

蘭が声を掛けても、厳しい面持ちで気まずそうに視線を合わす事さえ避ける始末で。その様子に、新一から聞いた例の件が頭を過ぎった。

史郎の書斎に姿を消した新一を気にしつつ、蘭はひと月ぶりの親友との会話に勤しんだ。しかし、それは蘭がそのつもりでいただけに過ぎず、実際には彼女の意識は絶え間無く新一達のいる部屋に向けられていた。

折角の貴重な時間に、蘭は園子に幾度か溜め息を洩らさせ、更にじとじと睨みつけられる羽目となつた。

「なあに、蘭。やっぱり新一君の事が気になるの？ 久し振りに会つた親友よりも男を取るなんて」

大袈裟に嘆く園子に慌てて言葉を返そうと、蘭も頭を廻らせた。

けれど凶星を突かれた決まり悪さから、つい口をつぐんでしまった。何も返し文句が見つからない。何も考えるゆとりが無かつたと言う方が正しい。

新一から聞かされた事実が、蘭の心に冷たい澱を落としたように彼女の動きそのものを鈍らせてしまつていた。

「……蘭、どうしたの？」

園子に問われて蘭の身体がピクリと引き攣った。無意識のうちに強張った顔を怪訝そうに見つめてさえいる。

蘭は一瞬、園子から視線を泳がせ無理矢理にでも返す言葉を模索した。

けれど咄嗟にそんなものなど見当もつかない。結局蘭は当惑しきり、
「何でもないよ」と応えるのが精一杯だった。

「（園子はまだ何も知らないんだから……出来る事ならこのまま知らないでいて欲しい）」

それが可能なのは蘭自身解らない。もしかしたら今日にでも事が明らかになってしまいかも知れない。新一がここにいる事で、何が変わるような気がしてならなかった。

鈴木財閥で起こっているインサイダー取引

蘭は正確なところまでは新一に聞いていなかった。あの新一が自分を訪ねて来た日、新一は蘭の気持ちを察してか結局核心には触れなかった。ただ最後に、

「ごめんな？」

一言そう零して蘭の部屋から帰って行ったのだ。新一が帰った後、蘭は気持ちを整理する事に努めた。全く予期しなかった事だけに、初めは困惑しか出来なかったが、それでも園子の事を考えれば、無理にでもそうするしか無かった。

泣いて泣いて泣いて、一週間近くそんな状態が続いた。自分にこんな事を話した新一を憎いとさえ思った。

けれど新一だって辛いのだと痛いほど解っていたから、すぐにその思いは拭い去った。

蘭と園子が唯一無二、一生の友達だと誓っている事は新一だって知っている。蘭に鈴木財閥の件を話せばどうなるかなど、新一にも容易に想像出来たはずだ。

それでも敢えて新一が蘭にそれを話したのは、蘭なら園子の支えになれる。そう確信していたからなのだろう。

わたしだってそのつもりなのに……どうして？

気持ちと裏腹に上手くそれが実践できない。実際に園子を目の前にするだけで、憐れみに近い感情が湧いてきてしまう。そしてそれは否定しようとするほど強くなる。

辛いし哀しい事だがコントロールが出来そうになかった。

「やっぱり今日の蘭……おかしいよ？ 悩み事とかあるんだったらあたしに話してよ。それとも親友のあたしにも話せない事なの？」

「……………」

心ここに在らずな蘭に、園子が堪らず詰問する。その時の表情があまりにも厳しくて、蘭はもう誤魔化しきる自信を失いかけてしまった。

「（もう隠しきれないよ、新一。話すしかない……よね？）」

未だ睨み顔で自分を見据える園子に、蘭は大きく深呼吸をひとつした。そうして乱れた心を落ち着かせると、強引に重い口を開いた。

「あのさ、園子。最初に……これと話したらわたし達は親友ではいられなくなるかも知れない。園子がそれでも良いなら知ってる事を全部話すよ」

蘭が“親友”を秤にかけたのは、園子に思い止まって欲しい気持ちからだ。そんな一縷の望みに賭けて、やっとの事で紡いだ祈りの声。

言い終えた蘭は固唾を呑んで園子の反応を窺った。

「……それでも、良いよ？」

この一言で蘭の期待は儂く散ってしまった。さすがに落胆の色を隠せない蘭に、園子が哀しげな瞳を向ける。そして

二人の間には分厚い壁が立ちはだかり、予想だにしなかった重い沈黙が永遠を刻んだ。

第二章：見え隠れする幾多の想い　〜三幕〜

「あたしはね、蘭。あんたがあたしのことで悩んで、その悩みを打ち明けたくないっていうなら無理には聞かないよ。でもそんな関係を続けるのは嫌。今の蘭とは親友で居たくなかないからさ」

「……園子？」

「ホントは知ってるんだよ。パパが今どんな状況でいるのか。そして新一君が裏で動いていることもね。多分蘭も新一君に聞いて知ってるんでしょ？　だけどあたしには知られたくないって思ってるのよね？」

園子の告白に、もう蘭は返す言葉に詰まった。知らない事と思っていた自分の浅はかさに、どだい返す言葉などありはしない。

諦めきつた園子の瞳が蘭に向けられ、微動だにせず見据えられる。蘭は無性に逃げ出したい思いに駆られた。

思いもよらない方向に動き出した園子の運命を、直視する事がどうにも怖くなったのだ。

しかしそんな思いとは裏腹に、身体が全く反応しない。蘭の心と身体は、完全に分離されてしまっていた。

「もう良いよ、蘭。試してごめんね？　あんたなら……あたしには包み隠さず話してくれるんじゃないかって思ったんだけどな。ダメだね、やっぱ。だって逆の立場だったらあたしにだって出来ないもん」

「……その……」

「今日は、ってゆうか、もうあたし達の“親友関係”は永遠にお終いにしよ？」

「！」

やおら言い放たれた言葉に蘭が絶句する中、園子は意外にさばさばとした顔をしていた。勿論、それが虚勢に過ぎないことは蘭にも分かった。

だが、分かっているくせに返す言の葉が見つからない。見つけれぬはずもない。

応接室のソファーに固まった蘭。彼女の思考は止まったに等しい。身じろぎも瞬きもしないで、気が振れたように焦点の合わない目で虚空を掴むさまは見ていて憐れだ。

恐らく蘭がこれまで生きてきた中でも、最悪の状況であることは確かだ。

そんな蘭の憐れ身に、さすがに園子の頬に涙が伝う。

それから暫くの時間が経ち、ようやく園子の瞳が乾いた頃だ。鈴木邸のチャイムが来客を告げた。けれどあいにく通いの家政婦が買い物に出掛けて不在だった。

そのため暫くチャイムが鳴り続ける。存外にしつこい客人に、園子は諦めて自ら迎えに玄関へと足を運んだ。

ただ、この行為には理由がある。今のまま蘭を控えることが辛かったからだ。無論、こんな状況に至らしめたのが自分だということは百も承知している。

だのに、予想の範疇を超えた蘭の狼狽振りにいたたまれなくなっ

てしまったのだ。

「……ごめん、ちょっと行ってくるから」

無反応な蘭を見遣った園子は、静かに部屋を後にした。そして廊下に出た彼女は深く大きなため息をついた。

それを微かに耳に留めた蘭が、やっと意識を確かにした。

筈だった。

少しののち、廊下を二つの足音が過ぎた。恐らくその内のひとつは園子のもの。そしてもうひとつは客人。史郎を訪れたのものであるうと思いついた。

その読みは確かに当たり、距離的に史郎の書斎であろう辺りで止まった。ノックの音が二、三回響き、ドアの開く気配が届いた。

この時蘭は、何を思ったのかその客人を見てみたいとの興味に駆られた。そっとソファから腰を上げ、やはりそつと応接室のドアに近寄る。

そして音を起てないように薄く開くと、気づかれないように顔を覗かせた。

すると史郎の顔が目に入り、丁度その客人を招き入れる処だった。まさに客人が書斎に足を踏み入れようと正面に向かった時だ。蘭からはその人物の横顔が窺えた。

一瞬のことではつきりとは見えなかったものの、意外に彫りの深い顔立ちに感じられる一般的な好青年といった印象が強い。ただ、財閥系の企業に勤めるには些か違う気もした。

彼 客人は男性で名前が不明なためこう呼ぶことにする が
史郎とどんな関係にあるかは分からない。ただ、蘭は何となく嫌な
予感がした。

何処はかとなく危険な空気を纏っている。不確かな憶測に過ぎない
かも知れないが、蘭はそんな気がしてならなかった。

しかし、今考えれば本当に危険な状態だったのは実は蘭の方
だった。この時点で蘭かその客人がこの場にいなければ、全ての悲
劇は回避出来たのに。

出会ってはならなかった2人。せめてこのすぐ後に顔さえ合わせ
なければ良かったのに。

運命とは実に残酷で儂いものだ。この瞬間、蘭の、園子の……そ
してジンや新一達、この場に揃った全ての者の運命が狂いを生じた。
決して引き返す事の出来ない地獄の始まり。そこに立ってしまっ
た彼女達の不幸は如何ほどか。

園子の溜め息で蘭には妙なスイッチが入っていた。それは蘭自身
も気付かないほど自然で、しかし不自然な感情の塊だった。

蘭は、よろめくような足取りで応接室を出ると史郎の書斎に向か
った。閉じられた書斎の扉の外で中の様子を窺っていた園子は、背
後に感じる妖しげな空気を覚って振り向いた。

そこへ蘭と瞳が合い吃驚の息を呑んだ。

「 な！ どうしたの、蘭！？ 」

「 ……」

「黙ってたら分かんないでしょ？ 一体どうしたってのよ」

「嫌だよ、園子」

「？」

「新一、居るんでしょ？ 聞こえてたら出てきてよ」

園子の問いには応えず、書斎に居るはずの新一を呼ぶ。蘭は焦点の合わない眼で扉を睨みつけると、穏やかな、それでいて有無を言わせぬ口調で新一を呼び付けた。

怪訝そうに園子の双睫がしばたき、眉が顰ひそめられる。そんな園子など見えないかのように、蘭は再度新一を促した。

するとようやく書斎の扉がキィと俄かな軋みを起して開かれ、部屋から新一が覗いた。

「……つたく、何なんだよ蘭？ オレは今、鈴木会長と大事な話をしてるんだ。用があるならあとで」

「今話したいの。わたしの言うこと……聞いてくれるよね、新一」

「だ〜か〜ら〜、あとでって言うてんだろ？ つつつか園子……蘭のやつ、おかしくねーか？」

さすがに新一も蘭の異変に気づいたらしく、脇にいた園子に問うてみた。空かさず園子が新一に頷くと、困惑しきりの表情で訴える。

「多分あたしが蘭に“親友やめよう”って言ったからだよ。あのあと蘭……ひどく落ち込んでたもの」

「あんだって？ 何でそんなこと」

「……」

「おい、園子。何とか言えよ！」

新一の詰問に園子は応えなかった。少なくとも今の蘭の前では応えなくなかった。

ここでこの真相を新一に告げれば、蘭に追い撃ちを掛けてしまおうと踏んだからだ。

一度蘭には告げてはいたが、同じことを話せば蘭が乱れてしまうと考えたのだ。

「ここでは言えない。蘭がいるから。あとであたしから新一君に電話入れるから待ってて」

「わあったよ、必ず電話しろよ？ ……で、蘭を家に送ってやってくれねーかな？」

園子と新一の会話が蘭の気持ちを煽る。聞き捨てならない単語の応酬に、蘭は自分本位な憶測を抱いた。

中でも園子が新一に言った『後で電話する』とのくだりは最悪だ

った。二人が自分に隠れてこそこそ連絡先を交換していると、あらぬ勘繰りをする始末だ。

「何で園子が知ってるの？」

「へ？ 何のことよ、蘭」

「誤魔化さないで、園子。新一の番号をどうしてあなたが知ってるの？」

「何よ今更。そんなの高校の時から知ってるわよ。しかも蘭、あんたから聞いたんじゃない」

園子の返事に蘭は眉を吊りあげてみせた。しかしこれは思い当たることがあったためのものでは無かった。

現に、蘭は過去を振り返る様子も無く、更なる疑いの眼を園子と新一に向けていた。

飽くまでも自分の考えを押し通す頑なさ。蘭のそんな態度に、園子も新一も絶句してしまった。

「蘭、とにかく今日は帰れ。そんな不安定なオメーには何も話すことはねえから」

「ふう、ん。わたしを帰して園子と秘密の時間を過ごすんだ。やっぱりわたしの思った通りだったのね……」

そう言つて、蘭は新一を睨むと“分かった”とばかりに踵を反した。

精も魂も尽きたようによろめきながら廊下を玄関に向かつて歩き出す。

途中背後から掛かった園子の

「誤解だよ蘭」という言葉にも耳を貸さず。

蘭が玄関先に着いた頃、新一と園子は苦み切つた顔で書斎の扉口に立ち尽くしていた。会話を交わすことも適わず、ただただお互いの顔を見合わせてため息をつく。

書斎からは史郎の当惑しきりの眼が向けられ、訪問者も思慮深げに天井を仰いでいた。

思いがけない蘭の言動が齎した波紋が、以外にもこの場に重くのしかかっていた。

けれどこののち、もっと重大かつ最悪の悲劇が待ち受けているとは誰も予測出来なかった。

玄関に着いた蘭は、一度振り返ると深いため息をついた。さきほどの自分の放つた醜い言葉が今になって脳裏を掠める。

必要以上に取り乱してしまったことを、蘭はすぐに後悔した。

けれど言い訳する気力も無く、おとなしく帰ることにした。

そして玄関の扉を開けた時、蘭はいきなり戸外に居た男に手刀を浴びせられてしまった。

ほどなく崩れ落ちる蘭を抱えあげると、その男は鈴木邸に上がり込んだ。

第三章：自ら開いた迷路への入口 ～一幕～

蘭を襲った男は、外見からはとても賊ぞくとは思えなかった。

織り目正しい濃紺の上下に、堅苦しく絞められたネクタイから、職業的にも堅い印象が窺うかがえる。

ましてや、蘭に向けられる目付きは、朴訥ぼくとつではあるが一種の優しい光を帯びてさえいた。

「済まないことをしたな。だが、もう手段を選んでいるほど悠長ではないんだ」

呟くような小さな声で意識を持たぬ蘭に零し、男は廊下を奥に歩む。

視界に新一と園子を捉らえ、辛うじて気取られずに脇の応接室に潜り込んだ。

「取り敢えず、ここに寝ていてくれるか。君を巻き込みたくないからな」

今更地味た勝手な言葉を放ち、男が蘭を申し訳なさそうに見下ろす。

そして重みのある深い息を吐くと、懐に忍ばせた禁忌の象徴を認めて顔を曇らせた。

「出来れば、これを使いたくは無いのだが」

そう漏らしながらも、最悪の事態は覚悟しているらしく、苦い表情で再度蘭を瞳に映し

男は固唾を飲んで応接室から忍び足で史郎の書斎へと歩き出した。

「……………うん」

丁度男が部屋のドアを閉めた時、蘭の意識が朧げに覚醒を始める。小さい呻きに呼び覚まされ、双眸に閉ざされた瞼がぴくりと攣った。

「……………」こは？ 確かわたし……………玄関を出て」

ゆっくりと開かれた蘭の瞳は、覚束ない虚空を巡った。

朦朧とする頭の隅には刹那に先刻の衝撃が蘇り、息もつかずに跳び起きる。

「まさか、強盗!？」

思わず声に出したことで、例えようのない恐怖が襲い掛かる。

蘭は自らの言葉を打ち消そうと、口唇に指を当てて眉を顰しかめた。

「こんな事してる場合じゃないのに！ 早く新一達に報せなきゃ」

ソファから飛び降りる形で立ち上がった蘭は、束の間思案げに首を傾げた。

けれど良策も浮かばず、小さく息をついて肩を竦める。

「こんな時に何も浮かばないなんて、バカだよね」

一人愚痴うそごして口唇を固く結んだ蘭は、それでも何かしないではいられなかった。

ただ、それこそが最悪のシナリオを完成させる事になるとは夢にも思わずにいた。

その頃史郎の書斎の前では、既に男と新一達が出くわしていた。無謀とも言える訪問に、新一と園子が息を呑んだ。

「な、あなた……もしかして勝手に上がり込んだんですか？」

「時間が無いんでな。最初はつから無茶は承知しているぞ」

「……だからって、やり過ぎじゃないですか？ 確証でも」

「ちょっと待つて！ 新一君、この人は誰なのよ？」

言葉尻を園子に奪われた新一が、半ばげんなりとした顔で長い息を漏らす。

場違いにも、園子は目を輝かせて男を興味深げに観察していた。

「私は」

「法務省特捜部の赤井捜査官……でしたね。噂は兼々」

「……ほお。さすが日本を代表する名探偵だな。一体どこまでこの件を知っているんだ？」

「ほぼ全容、とだけ答えておきます。で、それが何か？」

さらりと交わされたことで、赤井の口角が俄かに吊り上がった。新一は気にする風でもなく、涼しげな瞳で赤井を見透かす。

「もう一度言いますが、幾らあなたの職務上必要だとしても、勝手に人様の家上がるのは、越権行為では？」

「それは鈴木氏が善良な市民であれば、の話だ。そうだろう、探偵君？」

対する赤井も負けてはいない。さすがに百戦練磨の兵^{つわもの}だけあって、一筋縄ではいきそうにない。

新一と赤井の間には見えない火花が飛び交っているようで、挟まれた園子も堪らず口を挟んだ。

「うちのパパが善良な市民じゃないって言うの？ あなた、ちょっとカッコイイからって、勝手なことを言わないでちょうだい！」

「おいおい、オメーが絡むと拍子抜けすつから！ 黙って部屋に戻つてろ？」

窘^{たじな}める新一に面白くないとでも言いたげに、恨めしい顔で園子が冷たい目で刺す。

新一は呆れ顔で首を横に振って、尚も園子を急かした。

「判ったわよ。温和^{おとくな}しくしてれば良い訳ね？ 新一君のケチ！」

言うにこと欠いて、子供地味た一言を放って書齋に引つ込んだ園子と入れ代わりに、史郎の客人が顔を覗かせた。

刹那、赤井と対峙した客人の瞳孔が縮み上がった。

「き、貴様が特捜だと？ 何かの間違いだろう？」

「生憎だが冗談でもなければ、あんたの言う間違いでもない。ご愁傷さまだがな」

宿命とも取れる再会に、まるで暗雲が立ち込めるように怪しげな空気が流れ込む。

新一は一抹の不安を覚えて二人を交互に見遣った。

その様子を遠目に窺う蘭の姿にも気づかず。

「大学以来か？ 相変わらず危なっかしいことに首を突っ込んでるようだな。しかし、よりもよって……」

「フン。貴様には関係の無いこと……では無かったな。特捜つても厄介なもんだ」

世間話でもするように腹の探り合いを交わす二人に、新一は付ける隙を見つけれないでいた。

話の内容から、赤井と客人が旧知の仲であることは窺える。が、それ以上の情報は汲み取ることが出来ない。

傍観するしか手が無い新一は、手持ち無沙汰で落胆の息を深く吐いた。

とりあえず、鈴木会長への報告の途中だし、一旦部屋に戻るしかねーな……。

そう考えた新一は書斎の扉に手を掛けた。

そして把手を引いて開けようとしたその時、赤井達二人に動きが見られた。

「鈴木氏を強制連行する。これが令状だ。これの意味するものは、あんたも解ってるだろう？」

「誰にものを言ってやがる。これでも貴様と首席を争ったんだ。特捜の赤紙のことぐれえ識^しってるさ」

「では……そこをどいてくれ。あんたとは争う気は無いんだ、神^{ジン}」

口調は穏やかだったが二人の間には見えない火花が飛び交っているように見える。

新一は固唾を飲んで食い入った。そして思った。

……どんな因縁があるか知んねーけど、何かヤベーんじゃないか？ 赤井捜査官もそうだけど、神^{ジン}ってヤツも目が血走ってんじゃないか。放つといたらどうなっちまうか解りやしねー！ まさか、とは思っけど……考え、過ぎか？

新一が危惧したこと。それは強制連行を拒否した場合、最悪『強行手段』に出ることを赤井が許されているかも知れない事実だった。噂には聞いているが、銃の携行を許可されている辺りがその不安を掻き立てる。

「万が一のことを警戒して、新一は二人から目の離れない場所から注視することにした。」

「断ると言ったらどうする？ その懐に隠した銃ヤッパで俺を撃つか？」

「さすがだな。やはりあんたの目は抜かり無いみたいだ。だが」

赤井と首席を争っただけのことはあり、神ジンの洞察力には新一も目を見張った。

けれどこれで尚更気が抜けなくなり、新一の心臓は拍動を速めた。

なんだってんだ、この二人は。もしかしてこの状況を楽しんでやがんのか？

そんな新一の不安を他所よそに、赤井と神の睨にらみ合いは熾烈を極めてゆく。

張り詰めた空気を直じかに感じた新一の額には幾筋もの汗が滴り落ちた。

いや、額と言わず背中には染みが浮かぶほどの大量の汗が流れ、張りつくシャツが不快感を増長させた。

そんな緊迫感の溢れ返す中、僅かに床の軋む音が廊下に響いた。

「ねえ新一、そこに居るの？ 何だか怪しい人が」

「ばっ……蘭、来るんじゃないー！ つっーかオメー、帰ったんじゃないのかよ？」

いきなり踏み込んできた蘭も、目の前の状況に途中で言葉を飲み

込んでその場に立ち尽くした。

自分を襲った男が、やはり見知らぬ男と対峙していたからで無理はなかったのだが。

確実に蘭の動きを止めたのは、神ジンの右手に握られた黒光りする得物の存在だった。

「何を……してるんですか？ こんな所でそんな物騒なものを、何に使うんですか？」

元刑事の娘である蘭にとって、神ジンの右手に握られた銃は『特別』な物だ。

綺麗な言葉で例えるなら『神器』 正義を突き通す為の守護札みたいな物。

決して安易な考えで手にしてはならない、言い換えれば禁断の兇器だった。

「まさかそれを使うんですか？ 何の為に？ どうして？」

両親譲りの正義感から、蘭は震えながらも果敢に神ジンへと詰め寄ってゆく。

自らの危険は眼中に無いとでも言うつように、躊躇わず歩を進めた。

「バアロ っ！ それ以上近づくんじゃねー、蘭っ！ 挑発してるって解んねーのか？」

「放つといて！ わたしは元刑事の娘として許せないの！ 自分勝手な考えで人を傷つけようとするのが、どうしても許せないの！」

新一の制止を振り切って突き進む蘭を、神と赤井が苦々しい顔で睨んだ。

蘭は気にも留めず一直線に神に歩み寄った。

しかし、あと数歩の所でバランスを崩してしまった。そして蘭が倒れ込んだ先には。

「危ない つ！」

新一が飛び付くと同時に神の手元で轟音が吹いた。蘭が倒れ込んだ衝撃で弾鉄を弾いてしまったためだ。

そして弾かれた凶弾は……新一の胸部に深々と飲み込まれた。

「……え？ ちょっと……しん、いち？」

目の当たりにした蘭は、言葉を失くして立ち竦んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1182d/>

闇夜を奔るふた筋の煌光

2010年10月13日21時52分発行